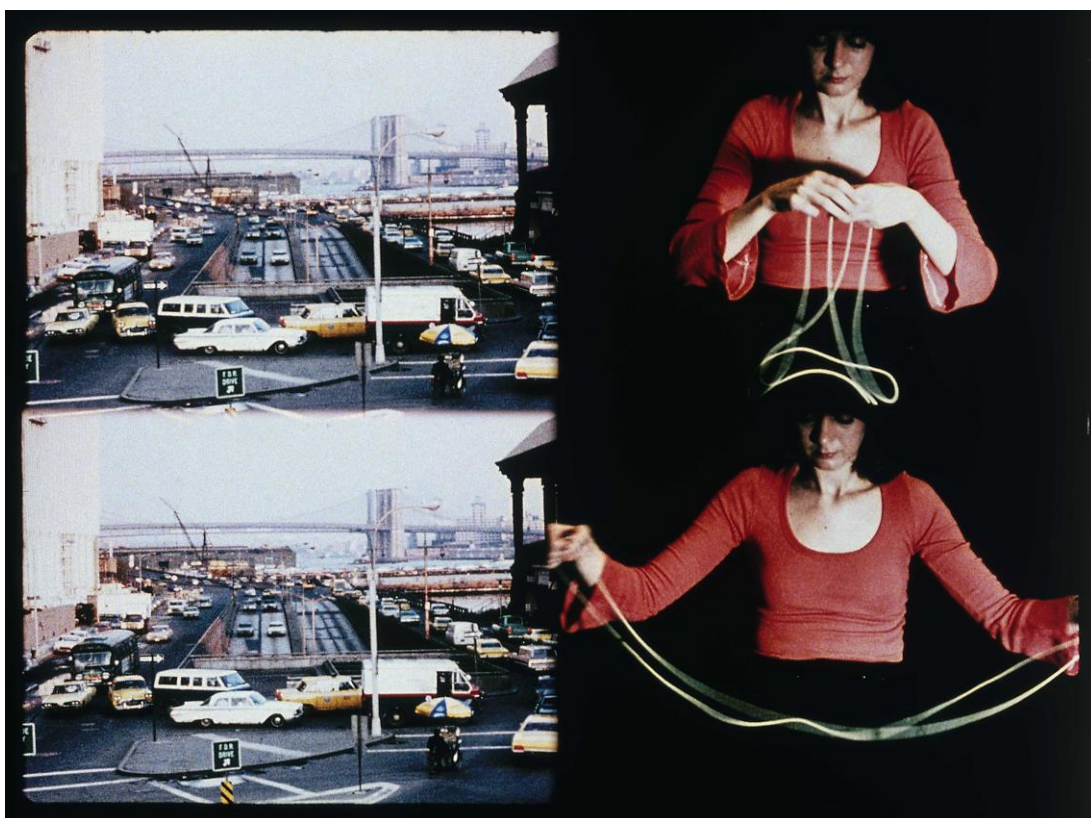


NFAJ ハンドアウト 第019号 目次

ハリー・スミス『マハゴニー (フィルム#18)』修復版上映に寄せて ラニ・シン(ハリー・スミス・アーカイブス)..... P.1
ハリー・スミスによる『マハゴニー』(フィルム#18)の説明..... P.3
『マハゴニー市の興亡』のあらすじ..... P.5

ハリー・スミス『マハゴニー (フィルム#18)』 (米国、1970-80年)



© Anthology Film Archives and Harry Smith Archives

マハゴニーを生きなければならないし、
そのためには、実際のところ、マハゴニーでなければならない。
ハリー・スミス

実験映画作家、人類学者、画家、そして音楽学者であるハリー・スミスの最後の映画は、スクリーンに4つの映像を投影した『マハゴニー』という壮大=叙事的な作品であった。スミスは、クルト・ヴァイルとベルトルト・ブレヒトのオペラ《マハゴニー市の興亡》を映画へと変換するのに10年もの年月を費やしたが、これを自らの最高傑作とみなしていた。スミスの友人たちが言うには、彼はこのオペラにすっかり心を奪われており、チェルシー・ホテルの一室で延々とそのレコードを再生していた。映画は1970年から72年にかけて撮影され、その後8年をかけて編集が行われた。本作の「計画」は、複雑な体系と秩序を擁した大変入念なものである。ヴァイルのオペラは、数秘術的で象徴的なシステムへと変換されている。映画内の映像は「P・A・S・A・N・A・S・A・P」という回文を形成するように、肖像 (portraits)、アニメーション

ン (animation)、象徴 (symbols)、自然 (nature) といったカテゴリーに分類されている。

『マハゴニー』は現代生活の寓話であり、ニューヨークで日常生活を営む人々の欲求、願望について探究している。マハゴニーと同様、スミスのニューヨークはあらゆることが許される場所であるが、そこで唯一罪となるのは十分な資金を所持していないことである。映画の大部分は、チェルシー・ホテル内での出来事である。本作にはアレン・ギンズバーグ、パティ・スミス、ジョナス・メカスといった重要な前衛芸術家たちの貴重な特別出演に加え、ロバート・メイプルソープのアトリエにあるインスタレーション作品、当時のニューヨークを示す様々な目印、そしてスミスの幻想的なアニメーションなどが含まれている。

スミスが描くニューヨーク生活と、ブレヒト／ヴァイルのオペラとの間には著しい親和性がある。どちらもいくらか架空のアメリカを舞台としながら、資本主義社会における生活をより普遍的に実証しようとしている。1930年にドイツのライプツィヒで行われた《マハゴニー市の興亡》の初演は騒動を巻き起こした。スミスがこのオペラを選じたのは、同じように過激な効果を生み出したいという欲望に駆られてのことだったが、ニューヨークで上映された際、彼のマハゴニーが大規模なデモを引き起こすことはなかった。

ポピュラー音楽を前衛的上演へと変容させたヴァイルにスミスは共鳴していたが、ヴァイルの作品とスミスの『アンソロジー・オブ・アメリカン・フォーク・ミュージック』(1952)との間にはある類似点を見いだすことができる。『アンソロジー』のために、スミスは伝承されたアメリカ^{フォークミュージック}民俗音楽の現存する市販の録音を集め、新たにそれを複雑な聴覚的コラージュへと編纂してみせた。ヴァイルのオペラや『アンソロジー』と同様、『マハゴニー』という作品はスミスが30年以上にわたって調査している多数の文化領域に取り組むために、本来の文脈から^{ヴァナキュラー}土着的な要素を取り出し、それによって「高級」と「低級」あるいは伝統的形式と急進的作品といったものの境界線を曖昧にしている。

『マハゴニー』の編集手順は非常に入り組んだものであった。スミスはシーンごとにインデックスカードを作り、それらをオペラと関連した様々な数学的配列に準じて組織化していった。各巻にある24のシーンは回文の順序に従ってあらわれる。スミスは、鑑賞者の呼吸や心拍といったある種の定数を考慮しながら各シーンの長さを決定していった。オペラの音楽と4つのスクリーンを同期させるために、スミスは編集後の各巻を示す^{スクロール}図表に加えて、タイムコードとオペラの場面リストを記した5つ目の図表を作成した。完成した映画は4つの16mmフィルムの映像から成っており、それらはオペラと同期した4画面を構成する映像の1つとして、スクリーン上に並べられている。

スミスの存命中に本作が公開されることは滅多になく、本人立ち会いの下で1980年にアンソロジー・フィルム・アーカイブスでわずか6回ほど上映されたにすぎなかった。スミスは本作をボクシングリング内にある4つのビリヤード台の上で上映したいと思っていたが、これが実現することはなかった。また彼は、オペラの字幕を表示させながら映画を映写するためのフレーム・フィルターなるものを構想したが、この目論みも実を結ぶことはなかった。

スミスによる当初の意図は、4つの16mm映写機を使って本作を上映することであった。2002年、私たちは上映をより容易にするために、16mm素材の複製を作製し、その16mmの各部分を1つの35mmフィルムへと移行させるという抜本的な変更を行った。^{オプティカル}光学的処理によって、16mmフィルムの原版から「タイル状に並べられた」1つの35mmフィルムネガが作製された。

それから20年後の2023年、本作は最先端の4K技術によって修復された。

ラニ・シン (ハリー・スミス・アーカイブス)

ハリー・スミスによる『マハゴニー (フィルム#18)』の説明

これはデュシャンの『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』(大ガラス)の数学的分析である。クルト・ヴァイルによる《マハゴニー市の興亡》の音楽とブレヒトの台本に基づく(しかし必ずしも順番通りではない)映像を、対位的に配置することで表現している。

4年以上にわたり、私はクルト・ヴァイルとベルトルト・ブレヒトによる傑作で、アメリカ生活のパロディである《マハゴニー市の興亡》の映画版の制作に取り組んでいる。

マハゴニーを表現手段として選んだのには2つの理由がある。1つ目は、オペラを構成する21の^{ソング}歌曲における反復の複雑さにもかかわらず、メロディを基本的特徴とする音楽文化とリズムを展開点として使用する音楽文化の両方の響きに相当するような部分があるからである。2つ目は、大勢の人々が一緒に楽しみ、自由と愛の規則を破り、結果的に忘れ去られていくといったように、物語が単純で一般的なものだからである。

私は映像によってこのオペラの「写実的な」バージョンを作ろうとしているわけではなく、むしろできる限りドイツ語のテキストのイメージを普遍的(もしくはほぼ普遍的)な象徴へと変換し、その適切なイメージを音楽に同期させようと思っている。

これらのイメージは割れた卵、植物の成長、雨降り、燃えさかる炎、身体の部分、平穏な街の光景といった250あまりのカテゴリーによって構成されている。フッテージの約半分は様々なアニメーションである。これらのアニメーションは主に円や点といった、あらゆる芸術に見いだせる基本的な象徴に基づいている。また、観客の方へ向かってきたり、通り過ぎたり、離れていったりする物体、もしくは突然形になって現れたり消滅したりする事物といったものが暗示する種々の感情も利用されている。

こうした方法は整然と規則に従っているため、完成した映画はあらゆる文化的背景や年代の人々に、したがって、ズールー人、エスキモー、オーストラリアのアボリジニにも同様に理解してもらえることができるだろう。

最終的に本作の形式は、ソング全体の時間に同期した——時には歌詞の一行の長さと同期したりもする——様々な長さを持つ一連のシーンといったものになるだろうが、これらすべてが以下のことを目的としている。すなわち、このオペラをあらゆる人間の生活と野望は類似しているという事実に基づく普遍的な台本へと変換することである。私の知る限り、パプア人にしろニューヨーカーにしろ、すべての人々のために映画を作るという試みはこれまでなされてこなかった。これはここ30年間で私が制作した20本ほどの映画の中では間違いなく最も複雑なものである。私の願いは、本作が単に成功するだけでなく、これが映画のための新しい理論的基盤を導入し、さらに、世界的に通用する象徴を用いることで、地球上のすべての人々をよりいっそう密接に結びつける一助となることである。

11時間以上に及ぶ映像素材の撮影は1972年7月に完了した。映画は6時間の利用可能なフッテージに編集されており、最終的にこれは4つのスクリーンに投影されるように組み替えられ、ブレヒトとヴァイルのオペラと同期された2時間21分¹の上映時間となる。

¹ NFAJ 註：本特集「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」で上映するDCPは先付けを含め2時間23分。

編集の最終段階では、手作業でカットしたスライドとフィルターで作られたカラーパターンを撮影し、それを各々のフィルムから選択されたショットに重ね合わせることになる。ショットは12の倍数という厳密な順列に基づいて編集されるが、その結果、様々なカテゴリーが暗示する種々の感情は、観客が持つ生来の感情的な脈動と一致することになるだろう。

アメリカ映画協会 (AFI) に対するハリー・スミスの助成金申請書 (1974年7月12日)

《マハゴニー市の興亡》のあらすじ

音楽：クルト・ヴァイル、台本：ベルトルト・ブレヒト

第1幕

それぞれの場を紹介するアナウンス。大恐慌時代、1台の古ぼけたトラックがアメリカのとある荒涼地帯で故障してしまう。やもめのベグビック、ファッティ、三位一体のモーセという3人の逃亡犯が車から降りてくる。行き場のない彼らは、そこに街を建設した——マハゴニーという網の街である（「ここに留まることにしよう」）。どこにいてもつらい労働はあるが、ここは娯楽の場となるだろう。1週間の内で働かなくてよいのが七日間。彼らはヤシの木の下にテーブルを置く。この「どうぞお好きなように酒場（Do As You Like Tavern）」が街の中心となる。

まもなくして短期滞在客や娼婦とともに街は繁栄していったが、その中にジェニーもいた（アラバマ・ソング：「ねえ、近くのウィスキー・バーに行く道を教えて」）。楽園だという噂が広まる（「私たちが住んでいる街では」）。不満を抱えた人々がマハゴニーに流れ込む。その中にアラスカから来たジミー・マホニー、アラスカ狼ジョー、ヤーコブ、守銭奴ビリーという4人の木こりがいた（「行こう、マハゴニーへ」）。やもめのベグビックはこのアラスカ人たちを歓迎し、彼らに娼婦をあてがったが、その中には彼女のお気に入りの新入りであるジェニーがいた。ジェニーはヤーコブに狙いをつける（「考えてみて」）。ジミーがジェニーを選び、彼女がまず口火を切る（「ジミー、あなたはもう私のもの」）。

しかし、マハゴニーの繁栄にも翳りが見え始める。網の街には何も引っかかかっていない。人々は去り、金と街の魅惑も消えていく（「ああ、このマハゴニーはもう」）。ジミーは「禁止」と書かれた立て札を見つけ、街を去ろうとする。好きなことなら何でも——帽子を食べてしまうことでさえ——やるとジミーは言うが、友人たちは彼をなだめ、街に連れ戻す。バーにいるジミーの不満は増すばかり（「雪を戴くアラスカの森の奥深く」）。マハゴニーは楽園などではない。そこには何も無い。彼は苦勞して手に入れた希望や金をこの無に費やしていた。マハゴニーが建設されたのは、頼るものがなにもなく、あまりにも平和だったからである。すべてが規則的で依存的となった今、マハゴニーはもう衰退してしまっている。

ハリケーンの接近（「大災害の恐ろしい脅威・・・きょうだいたちよ、しっかりしろ」）。人間の幸せは無法状態と道徳観念の欠如に基づいていることをジミーは夜に悟る（「自業自得」）。

第2幕

「ほしいものがあれば、ただそれを手に入れるだけ」——マハゴニーは奇跡的に嵐から難を逃れたが、その時からこれが人々のモットーとなった。男たちが言う、「はじめに暴食、次にセックス、そしてボクシング、さいごに酒盛り」。大食漢のヤーコブは食べすぎて至福のまま死を迎える（「食べ終わった」）。やもめのベグビックは男たちを売春宿へと急き立てる（「チューインガムは吐き出して」）。ジミーとジェニーは通り過ぎる鶴を眺めているが、彼らの深いつながりも束の間であることに切なくも気がついている（「鶴の二重唱：「空を舞うあの鶴を見て」」）。次にボクシングの試合で、ジミーは有り金をすべてジョーに賭けるが（「さあ、賭けボクシングだ」）、負けてしまう。ジョーが三位一体のモーセのパンチで絶命したからだ。バーで、みんなが飲んでいる（「マハゴニーの男たち」）、ジミーによる逃亡の幻想——彼はビリヤード台を嵐で難破したアラスカ行きの船だと思い込んでいる——は、彼がマハゴニーに「上陸」した時に消滅する。さらに、彼は飲み代や壊れたビリヤードのキューの弁償をすることができない。ジェニーを含め、彼に救いの手を差し伸べるものは誰もいな

い。ジェニーは彼らに対して、自分自身の心配をするように助言する（反復：「自業自得」）。

第3幕

森の中の木に縛りつけられているジミーは、夜が明けるのを恐れている（「空が明るくなってくると」）。

マハゴニーの法廷は一種の演劇である（「みんな、入場料は払ったか？」）。検察官である三位一体のモーゼがチケットを売っている。ある殺人者は無罪を宣告される。次にジミー・マホーニーの事案となり、以下の判決が言い渡される。ジェニーを誘惑したり、禁止歌を歌ったりといった小さな違反に対しては禁錮刑や重労働。しかし、金を持っていないという最も大きな罪によって、彼は即刻死刑を宣告される。

マハゴニーの市民は、かつてマハゴニーを夢見たように、今ではベナレスという別の街の夢を見ている（ベナレス・ソング：「この街に金はない」）。

ジミーはみんなに別れを告げながら、彼らにはできるかぎり精一杯生きるように勧める（「騙されるな」）。人々がマハゴニーに降臨する神についての劇を上演している最中に、ジミーは電気椅子で処刑される。人々は神の言う地獄の脅威に対して自分たちが何とも思っていないことに気づく。なぜなら、彼らはすでに地獄にいるからだ（「ある寒い陰気な午後に」）。

今や生活費は法外な金額となっている。マハゴニーの終末を告げ知らせる大規模な行進。群衆のプラカードがこの現実において反目し合う人々の様子を示している。ジミーの棺が運ばれてくる。「死人を救うことはできない」というスローガン。「自分たちもお前たちも誰も救うことはできない」。

引用文献：

Mahagonny, A Sourcebook, edited by Joanna Lee, Edward Harsh, and Kim Kowalke (New York: Kurt Weill Foundation for Music, 1995).

ハリー・スミス・アーカイブス・ウェブサイト：www.harrysmitharchives.com

（訳：木原圭翔）